

偉大な女性 Liz Bates の思い出

黒田 航

(独) 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

Revised 07/20/2009; Created 12/D/2003

Updates

先日, Michael Tomasello と Dan I. Slobin が編者になって *Beyond Nature-Nurture: Essays in Honor of Elizabeth Bates* (Lawrence Erlbaum Associates, 2004) が出た. 興味のある方は一読を勧める.

1

12/13/2003 に, Liz Bates が亡くなった. 56 歳だった. 一年足らずの膵臓ガンとの闘病生活だった. いずれはその知らせを受けるとは覚悟していたが, Jeff Elman からメールでそのことを知ったときは, やっぱり悲しかった. 何でこんなに偉大な人が, たったの 56 で死ななきゃならんのだろう? と理不尽に思い, そう思うと, ますます悲しくなった.

Liz Bates は私が今までに出会った中でもっとも偉大な人物の一人である. 彼女は Center for Research in Language, UCSD¹⁾ の元所長であり, 私が同研究所に客員研究員として滞在した 2001/09-2002/12 までの一年三ヶ月のあいだ, 個人的に大変にお世話になった. 私は彼女のことを個人的に知る人間の一人, 特に彼女を知る数少ない日本人として, 彼女の人柄を記録しておく義務を感じる.

2

Liz は大きな目をした. ブロンドで小柄な女性だったが, いつも堂々としていた. 実際, 初めて会ったときに, 私は彼女の男性的な感じに圧倒された. しかし, それは彼女の容貌から来

る印象ではなくて, 話し方から来ていた.

Liz は, いつも非常に感情豊かに, 猛烈に早口で喋った. 彼女は, 実際私が知っているうちで, もっとも早口な人の一人だ. 留学当初, 私は彼女の言っていることが聞き取れず, 少なからず落ち込んだ. しかし, その後, アメリカ人でも彼女の言っていることの全部が分かっているわけではない, ということが分かって, 少し慰められた.

Liz はいつでも, どこでも真摯だったが, 生真面目という感じではなかった. いつでも冗談を言っていた. PDP/NLP という名の週に一度の定例会²⁾では発表の開始に先立って, 巧妙な冗談を交えつつ発表者の紹介を, 猛烈な早口でこなしていた.

Liz は左利きだった. 筆跡は大きく, 明瞭のためらいがなく, 意志の強さが現われていたように思う. 白版にその字を書くときは, とときどき首を傾げ, 長めボブの髪を振り払いながらそうしていた.

Liz は非常に多忙な人だった. それ以上に, Liz は正しく仕事の鬼だった. いつでも, どこで

²⁾ PDP は “Parallel Distributed Processing,” “NLP は Natural Language Processing” の頭文字であったが, この名称は少なからず形骸化しており, 私が滞在している間は PDP/NLP 関係の研究発表は皆無に近かった. それに代わって, 言語心理学系の発表が主だった. それは CRL の監督権限が Jeff Elman から Liz に移ったことにも関係があったのだろう. 私が滞在中は, Simple Recurrent Network (SRN) の創始者として名高い Jeff はコーパス言語学, 言語の統計解析に接近し, あまりコネクショニスト関係の研究はしていなかった. 因みに, SRN の学習能力に関しては, コネクショニスト研究の大御所の一人である Gary Cottrel (UCSD) が「SRN のことを初めて聞いたときには, とても信じられなかった. 当時の常識からはかけ離れていた」と言っていた.

¹⁾ <http://crl.ucsd.edu/>

も仕事をしていて、休んでいるのを見たことがない。猛烈な集中力、精神力だった。これが彼女の寿命を縮めたのは、まちがいない。彼女は肉体的苦痛を感じても、精神力で押さえていたに違いない。それが膵臓ガンの発見を遅らせ、死期を早めたのは皮肉である。因みに、彼女の母親もまったく同様の症状で亡くなっているようだ。

Liz のガンの発見が遅れたのには、幾つか理由がある。彼女はものすごく医者が嫌いだったと聞いている。彼女の苦手な数少ないものの一つが医者だったようだ。

Liz は友人や知人には恵まれていたが、医者には恵まなかったようだ。一回目の診察では、担当した医者は膵臓ガンを診断できなかった。その二ヶ月ぐらい後の症状の再発で診察を受けたとき、膵臓ガンだと判った。膵臓ガンの早期発見は難しいと言われている。彼女の医者嫌い、ガンのタイプの悪さ、医者の経験不足が重なって、彼女にとって不幸な結果になったようだ。

3

Liz は学生、後輩、同僚の面倒を非常に丁寧に見ていた。彼女のオフィスにはひっきりなしに誰かが訪れていた。Liz の部屋に彼女一人なのは平日の夜と、土日の昼間だけだった。

とにかく Liz は人生の後輩に優しく、自分に可能な限りの助力を惜しまないタイプの指導者だった。彼女は私が Center for Research in Language で一年を過ごすことが決まったとき、見ず知らずの他人である私の研究が充実したものになるように、真剣に心配してくれた。私は初めはこのことが分からず、どうしてそこまで心配するのだろうか？信用されていないのだろうか？と少し気分を害していたが、それは誤解だと分かった。彼女はホントに特に深い理由もなく、ただ、ただ心配していたのである。

この例に限らず、私は Liz の学生に接する態度から特に多くを学んだ気がする。彼女はその援助の姿勢を、彼女が Chicago を出たばかりで、右も左も分からない新人診療士として Boston Clinic に勤めだした頃、Harold Goodglass から

受けた精神的援助に負っていると³⁾、何かの機会に学生に説明したことがある。この話を聞いて、こういう善意の姿勢は受け継がれるものなのだというのを、私は強く学んだ。

とにかく、Liz は学生の面倒見が良かった。それは自分の指導している学生に限らない。彼女は非常に多くの学生から慕われていた。が、それは明らかに彼女の努力の結果、呆れるくらいの面倒見の良さの結果なのであった。それを見て私は思った：アメリカという国の底力は human power/resources にある。実際、私はアメリカでの師弟関係は日本以上に強力なのを幾度かの機会に確かめてきた。これは意外に思えるかも知れない。だが、理由は明らかで、日本の大学の先生は学生の面倒見が悪いからである。日本の研究界には、残念ながら学生の親身の指導と自分の研究を両立させるという伝統が強くない。日本には恩は売って自分の将来に利用しようとする俗物が多いかも知れない。が、アメリカの学者の世界で支配的なのは、徹頭徹尾に善意の師弟関係なのではないか、と私は思う。

Liz は資金の使い方に計画性がなかったと聞いている。彼女はあちこちからそれなりの額の資金を調達してたようだが、それを自分の調達した fund なんだから、すべて自分の勝手に使えろと思っていたという。そのため、ときどき計画になかった出費をすることがあり、それが原因で CRL の世話人の Shelly Marquez ともめていた。その度に、廊下には大声でのやり取りが鳴り響き、Liz の研究助手の Meiti Opie が彼らの間を取り持っていた⁴⁾。

Liz は、世界各地に共同研究者をもっていた。そして、研究の話で世界各地の相手と、それなりの長電話をしていた。彼女は電話口では、たいてい愉快そうに、大声で喋っていた。それで、彼女の自信に溢れる活快な声は、周りの部屋まで良く響いた。電話は多いときには、10 分間

³⁾ もしかしたら、Goodglass ではなくて、ほかの誰かだったかも知れない。今となっては確かめようがないが、確実に覚えているのは、Liz が世話になったのは失語症の大家だったということである。

⁴⁾ Meiti は polyglot で、その能力を買われて、Liz の研究助手として雇われていた。彼女は、CRL の皆から敬意を込めて、“Mighty Meiti” の名で呼ばれていた。

隔で鳴った。その一つ一つに、彼女は、独特の“Helllllloh!”という挨拶で応答した。私の部屋は Liz の部屋の斜め向かいにあり、多い日には一日に何十回とその陽気な挨拶を聞いた。

4

Center for Research in Language⁵⁾には一つ、かなり風変わりなスタイルがある。在室中は誰でも自分の仕事部屋のドアを開けばなしにし、ノックなしで部屋に入ってこれるようにしてある。ドアが開いていないということは、部屋に居ないということなのである。Jeff は仕事に集中したいときにはドアを閉めることもあったが、原則として皆がこの暗黙のルールに従っていた。⁶⁾これを始めたのは、どうやら Liz らしかった。これは彼女の「来るものは拒まず」の姿勢、open mindedness を非常に良く表わしているように思う。CRL では異なる研究分野の研究者が相互作用しあうことを強く奨励していた。それも Liz の意向を強く反映したものだのように思う。

Liz の共同研究者はイタリアに多かった。というわけで、彼女が電話をしているときは、英語が7割、イタリア語が3割という感じだった。

Liz はどういう理由からか、イタリアがご贔屓だった。Jeff の説明では、彼女にとってイタリアは特別な国だったそうだ。旦那さんの George Carnevale と出会ったのも、そこでだったそうだ。彼女のイタリアびいきは学生にも周知の事実だったようで、あるとき、こういうこともあっ

⁵⁾ Center といっても、規模は大きくない。USCD の Cognitive Science Department の二階の一部の棟で構成されている。このように小規模な Center や Institute がアメリカの大学にはたくさんあるようだ。私は216にオフィスを割り当てられ、そこを、ドイツからの留学生の Holger Keibel と共有した。216 は中庭の見える明るい部屋だったが、午前中は明るすぎて、液晶の画面が見にくかった。隣は事務所であり、Maria Aranda と Miriam Morales が仕事をしてた。

⁶⁾ 私はこれに何の抵抗もなく、すぐに馴れたが、後で私と同室になった Holger は初め、この「奇妙な慣習」になじめず、苦勞していたようだった。ドイツ人は、アメリカ人以上に部屋を閉めたがると知ったのは、ずいぶん後になってからのことだった。Holger の「受難」に関するドイツ人の気質に関する詳細は [1] を参照されたい。

た：ある日突然、Liz のオフィスの入り口に、真っ赤な仮面の男が写っていて“Venezia – What a lovely odd place!”と書かれた雑誌の表紙—確かそれは *Economist* の表紙だったと思う。その場違いな感じを何となく覚えている—が貼ってあったりした。学生が贈り物したのである。彼女はそれを見て無邪気に喜ぶ声は、私の部屋まで聞えた。これに限らず、彼女は個人的に面白いと思うこと、あるいは不愉快だと感じることもあると、フロアの全員にそれを知らせなければならぬかのように、大声で話した。ドアが開きっぱなしなので、聞えるのである。

Liz のイタリア語は流暢だったが、決して上手ではなかった。しかし、それには魔術的な影響力があったらしい。これは Jeff から聞いたのだが、Liz のイタリア語は native にも影響を与える、独特なものだったということだ。彼の説明では、こういうことが何度かあった：Liz の友人がイタリアから CRL を訪れ、しばらく滞在して帰国する。彼らは帰国後に自分らの知人友人から「おまえのイタリア語は何か変だ。どうしたんだ？」と質問される。Liz の訛りが native に移ったらしい。

Liz は男性的な話し方をしていたと思う。彼女の言動には常に強い意志の力があり、確信があり、説得力があったように思う。

Liz の部屋のドアには、幾つか写真が貼ってあった。一つは“Bates Nuts Farm”という農場の写真(Nutsには隠語でキチガイという意味がある)。もう一つは、Noam Chomsky の若い頃の写真と武装したアラブ兵らしき男の漫画風の絵写真が並べられ、それには『生き別れになった双子?』とコメントが入っていた。もう一つは確か、島に二人だけで住んでいる原始人らしき男女が描かれていて、女性の方が両脚を抱えながら“I wanna talk ...”とつぶやき、男性は石斧をもって、女が何を言っているのか不思議がっている、という漫画だった。出典はわからない。

Liz はとにかく時間を惜しんで仕事をしていた。論文を書いている最中に、並行して数分おきに世界中から彼女のもとに届く電子メールをチェックし、そのほとんどの返事を出していた、Eudora の新規メッセージの到着音が彼女の部屋

の周りでは鳴り響いていた。実際、彼女が講義中や来客中などの時以外は、私の出したメールには、どんな些細な用件のものにも、たいてい15分以内に返事が来た。彼女からのメールの文章は常に単一パラグラフである。どんなに長くても、そうだった。そして、その最後はいつも改行なしで“-liz”で終わっていた。おそらく改行する時間が惜しかったのだろう。

5

Lizの記憶力は超人的だったが、興味深いことに、本人の言によると人の顔を覚えるのが苦手なことで、ことあるたびに自分は生まれつきの相貌失認症だと嘆いていた。本当にそうなのかは、私は知らない。彼女はもしかしたら、単に自分の言語的記憶力に較べて相対的に相貌記憶力が劣っているのを嘆いていただけなのかも知れない。これは能力の高い人にはありがちな、不正確で不当な自己評価の典型であるように思えた。

Lizは確かに非常に視力が低かった。眼鏡の度の強さは牛乳瓶の底というヤツだった。彼女の相貌失認は単に視力の不足によるものかも知れない。

Lizの部屋は散らかっていた。あたり一面、論文だらけだった。その散らかっている部屋で遅くまで仕事をするLizを何度となく見た。彼女は一人で仕事を始めると完全にそれに没頭した。部屋の明かりをつけるのを忘れ、いつまでも薄暗い部屋の中でスクリーンを見つめているLizを何度となく見かけた。この種の生活は、明らかに彼女の視力の低下に手を貸したに違いない。

LizはUCSDキャンパスのすぐ近くに住んでいた(私もそこにはLizの指導した学生Nichola WichaのPh.D. thesisのdefense後のパーティーで一度訪れたことがある。そのとき、若い頃Lizの写真を見た。美人だった)。旦那さんが勤務するScripps Institute of Oceanographyの近くで、UCSDキャンパスにも歩いて通える距離だったが、彼女は論文の持ち運びのために、クルマで移動していた。論文の少ない日は徒歩で往復しているのを見かけることもあった。

Lizは一人娘のJuliaを自慢していた。直接の面識はないが、私がCRLに出入りを始めたと

き、彼女はStanfordに入学したばかり—あるいは大学院に進学したばかり—だったようだ。自分の愛娘の話が、Lizのする非常に数少ない研究以外の話の一つだった。

6

こう言うのは簡単だが、本当に偉大な人を亡くしたと思う。人生は、理不尽である。

参考文献

[1] 熊谷 徹. びっくり先進国ドイツ. 新潮社, 2004.